



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	生物系新センターの発足と技術部の将来
Author(s)	太田原, 高昭
Citation	北海道大学大学院農学研究科・農学部技術部研究・技術報告, 8
Issue Date	2001-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35404
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_kankou.pdf



生物系新センターの発足と技術部の将来

技術部長 太田原 高昭（研究科長）

懸案の概算要求が通り、13年度予算案が国会を通過すると、新年度から「北方生物圏フィールド科学センター」が発足する。これは農学部附属の演習林、農場、植物園、牧場に理学部附属臨海実験所（厚岸）、海藻研究施設（室蘭）、水産学部附属の臨湖実験所（洞爺湖）、水産実験所（南茅部）、養魚実習施設（七飯）、および忍路臨海実験所（共同施設）の10施設が合同して単一の全学共同利用施設をつくるものである。

4月1日スタートを期して現在諸規定の整備や教官人事など詰めの作業が急がれているが、これが完成すれば教官数45名、職員を含めれば優に270名を超す大組織が生まれることになる。附属施設は、大学院重点化を中心とする大学改革の中でやや取り残された感があったが、これで一気におくれを取り戻すことが出来るだろう。こうした大改革がまず北大で実現したのは、関係者のこれまでの努力が全国的に認められたからであろう。

教育研究の中身についても、これだけの施設が一体化することで、森林圏、耕地圏、水圏を通して環境問題や生物生産を一貫した視野で扱えることの意義は大きい。現在、民間では資源保全のために漁業者が山に登って木を植えるとか、畜産廃棄物の土壌還元による環境浄化などの努力が行われているが、新センターはこうした面で大きな貢献をすることが期待される。有明海のノリ資源の問題も北大で解決ということさえ夢ではないのである。

この新しい組織の中で技官が担う役割はきわめて大きいと考えられるが、その組織化はどのようになるのであろうか。まだはっきりしたことは言えないが、これまでの技術部という在り方ではなく、「技術室」という新しい組織に編制する考え方がとられている。現在の農場および演習林の技術部は解体して「技術室」に統合される。これまで農学部技術部と一緒にやってきた植物園と牧場

の技官も当然そこに参加することになる。

「技術室」の組織をどういうものにしていくかは、新センターにおいて考えていくことになるが、農学部技術部はどうなるのだろうか。植物園9名、牧場8名の大部隊が抜けると残るは12名で、半分以上の勢力減である。今までのような活動は難しくなるのではないかと私も心配している。しかし、これより少ない人数で活動している技術部も学内には少なくないから、制度的には当面減員のまま継続ということになるだろう。

したがって活動には新しい工夫が必要になるだろう。これまでも検討された他の技術部との合同研修会などが現実の課題となるだろう。差し当たり新センターの技術室との交流を考えてみてはどうだろうか、教官についてもセンターと関連研究科との交流や共同研究を推進しなければならないのだから、それを支える役割があるし、新しい技術室の在り方を考える上でも交流は大きな力になる。技術者の立場から、新センターへの積極的な支援をお願いしたいのである。